

# 個人として扱う

築紫 裕子

私たちはとかく、人をグループにして見てしまいがちです。「最近の若者は・・・」とか、「年寄り皆・・・」「男の子はいつも・・・」「日本人は・・・」、または、「どここの社員」「何々部の連中」というように。

もちろん、同じような立場や状況にある人をグループ化すること自体、悪いことではないし、そうすることが必要な場合も多々あります。ただ問題は、そうしている内に、人のことを十把一絡げにしてしまうことです。例えば、グループ内の誰かが問題を起こすと、他の人たちも同じに違いないと色眼鏡で見られるようになり、偏見が広がっていきます。

偏見や決めつけるような見方をすると、人を傷つけるだけではなく、可能性を奪ってしまうことにもなりかねません。それに対して、相手がどんな「グループ」に属するかに関係なく、個々の能力や良さを見抜き、その人を「一人の人間」として扱える人は、より良い関係を築くことができるし、相手の人もさらに自分を伸ばすことができます。

大人はつい、子供をひとまとめにして考えてしまうものですが、ある母親はこんなふうに語りました。

「私には男の子が3人いますが、庭でクモの巣を見つけたら、みな違った反応をするでしょう。長男はじっくり観察してクモはどうやって巣を作ったのだろうかと考え、次男は、クモがどこにいるのかと心配するでしょう。三男は興奮して、『わあ、トランポリンみたい!』って言うんじゃないかと思えます。同じ男の子でも全く違った反応をするんです。」

同じ親から生まれ、同じ家庭に育ち、顔もそっくりだったとしても、兄弟姉妹みな性格も感じ方も違いますし、将来進む道も異なることでしょう。基本的に同じような世話や扱いを受けても、結果は異なるのです。

こうして考えてみると、人間とは素晴らしいものですね。神がこのように一人一人を独特に造られたのですから、私たちも一人一人を愛し、大切にしたいものです。

ドワイト・アイゼンハワー（第34代米大統領）の母親が語った次の言葉は、そのことをよく表しています。ある時、空港で、有名人となったアイゼンハワーの帰りを待っていた母親に、記者が声をかけました。「偉大なる息子さんのことを、さぞかし誇りに思っているんじゃないでしょうか。」すると、年老いた白髪の母親は、微笑みながらこう言ったそうです。「どの息子のことですか？」その尊い母親にとっては、どの息子も同様に偉大であり、大切に誇りだったのです。

聖書にも、神がどれほど一人一人を独自の存在として扱って下さるかが書かれています。イエスと人間との関係が、羊と羊飼いにたとえられている場面の中で、羊飼いのイエスは、一人一人の名前を呼んで、私達を神のもとに導こうとしておられると書かれています。

「彼（イエス）は自分の羊の名をよんで連れ出す。・・・わたしは来たのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、羊が自分のものではない雇い人は、おおかみが来るのを見ると、羊を捨て逃げ去る。」（ヨハネ 10:3,10-12）

「神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生かすようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。」（第一ヨハネ 4:9）

このように、神は一人一人を特別に愛し、その人に一番合った方法で人生を導き助けて下さるのです。私たちも、周りの一人一人を独自の存在として認め、大切にすることができますように。

